

やっぱり「ヒト」が好きだから

平成16年に岡山県に入庁し、11年目の今年の4月に岡山県備北保健所長を拝命いたしました。「若手」と名乗るのは心苦しくはありますが、いままでを振り返りつつ、新しい立場に就いて思うことをまとめる機会をいただいたと思い、このコーナーの原稿執筆を引き受けさせていただきます。

行政に転職したのは少しマイナスな理由

平成13～15年の3年間で、卒業大学のあった名古屋市内の病院で臨床をしながら。約300床の病院で、1年半の各科ローテーションを経験したあと、新生児集中治療室（NICU）のある小児科で1年半フィックスの研修を受けました。

3年目は1人当直もあり、未熟な自分が当直をするときに不利益を被る患者さんがいるのではないかと、臨床を続けることに苦しさを感じていたとき、医局長から「君が進みたいのが児童精神なら、違う病院で研鑽を積んだほうがよい」と

勧められ、自身の進路を改めて考えていました。ちょうどその時期に、父親の知人である岡山県の保健所長の先生から、岡山県が「若手行政医師を募集している」との情報いただきました。いずれは出身地の岡山にUターン就職を考えていたこともあり、転職する運びとなりました。

縦割りの世界に驚きつつも適応

児童相談所には子どもの発達を判定する医師がいるから児童精神の研鑽を積めるはずと、心安く転職をしました。公衆衛生学や疫学に造詣が深かったわけではなく、転職後に岡山県の児童相談所の医

師は嘱託医で、自分には保健所長の道が示されていることを知りましたが、生来成り行き任せの性格でしたので、そのままお世話になることを決めました。

1年目は県庁の母子保健担当の班に配属されました。一人でどこまでやってよいのかがわからず、そもそも「起案」「発番」等の行政用語を理解することから始まり、保健所が何をやっているのかわからないし、県庁の定めるべき役割もわかっていない状態で、先天性代謝異常など変化の少ない事業を担当させていただいたのですが、それでも本当に役に立たない職員だったと反省しきりです。

そんな状況ではありましたが、わからないなりに書類を作り何かをしようとする、関係部署から必ず何かしらの意見を言われること、国から依頼された状況把握調査でも、かなり調整が必要で、な

かなか実施できないことが理解できず、「これが縦割り仕事の具体例か!」新たな仕事を引き受ける職員は無能扱いなのだ。」と、いままでは違う仕事の進み方に疑問をもった時期もありました。

いまでは、縦割りではなく、扱っている事務の根拠法令等が複雑で、行政における担当とは「所掌する事務についての根拠や正確性について最新情報等を把握し、その事務の執行に責任をもつ」もので、担当以外には「最新の正確な情報かどうか責任がとれない」という意味で、医療の世界でいう「専門医」に近いとわかってきましたが、それは行政内の事情で、外から見れば縦割りといわれるのもしかたがないとも感じていました。

この最初の1年で、コスト意識と公平性、将来展望のすべてが満たされなければ、行政は事を起こすことが難しいことを教えていただきました。

た。個々人の利益や、試験的な実施（医療現場では診断的治療でしょうか）は行政では通用しないのです。

経験を少しずつ増やしなが

入庁したときは、行政の医師は保健所長、県庁課長以外は一人だけでしたので、直属上司の課長以外の行政医師に会う機会ほぼありませんでした。それは、岡山県の行政医師の採用には10年以上の空白があったことによるもので、岡山県の行政医師のキャリアパスが描かれていた状況ではなかったのです。

しかし、配属された保健所の所長、保健師をはじめとする上司の方が与え得る限りの研修等の機会をくださったことで、経験年数に応じた成長の機会をいただくことができました。22～24年度の3年間は、毎年度異動を重ね、同じ感染症担当も本庁・保健指導担当・事務・班長（係長）と立場を変えて経験し、与えられている業務の枠を超えて保健医療科学院や国立感染症研究所などで研修を受講させていただきました。

これだけの機会がいただけたのは、他の職種と比べると特別なこと

でしたが、学生時代からできのよくなかった私には、一つひとつの経験からみずからの考えを深め、研修で整理していくことができ、幸運だったと感じています。

私のキャリアの形成は、「ヒト」のつながりに恵まれていたことによりなされたものか、近年に前例がないため明文化されていなかった、実際は「暗黙の存在」であった県のキャリアパスに従ったものかはわかりません。しかし、この10年間で仕事のこと、人間関係のこと、医師としてとるべき役割などでたびたび悩み落ち込みましたが、立ち直る契機は、いつもヒトとの出会いや話し合うことでした。やっぱりヒトが好きだと何度も確信し、ヒトとかわるいまの仕事にやりがいを感じています。

立場が変わり、急に所属長として振る舞わなければならない日々におどおどしつつ、「いままで先輩方に指摘されてきたことはこういうことだったのだ」とまた、いままさらながら気づかされています。

相乗効果をめざしつつ

所長になって5か月、毎日笑顔

でやっていけるのは、先達の足跡と職場の仲間と地域の皆さまの支援があったことです。一人ではないと感じるから楽しいのです。

まず、岡山県には愛育委員連合会と栄養改善協議会という、全国に誇れる健康づくりボランティアの組織があります。この組織の市町村の会長クラスの方は私の人生と同じく長い期間、地域住民の健康増進のために取り組んでこれ私などが太刀打ちできる方々ではありません。

また、地域医療を支えてくださっている大先輩の医師会の先生方がいます。医師会の先生方とお話をする機会は入庁してから初めていただいたのですが、どの会議でも前向きで地域の医療をよりよくしようという高い意識で臨まれていて、私自身なかなか先生方が希望されるような対応ができないことで、申し訳ない気持ちでいます。

そういった方々が、地域住民の健康づくりや医療連携に取り組もうとするときに、保健所に相談していただくこともあります。逆に保健所が何かしようとするときには、若輩者の私の想いを受け止め

てください、一緒に考えて取り組んでいただいています。この関係は先輩の保健所長・保健師さんが培ってきたものなので、大切に引き継いでいこうと思っています。1足す1が2以上の効果を出す、相乗効果をめざすことこそ、ヒトが一緒に何かをする理由です。前向きでない決意表明になりますが、せめて私は0にならないように、地域の方々が望んだ場所、安心して健康に楽しく生活できるように何ができるかを懸命に考え、努力していきたいと思っています。

地域で暮らす普通の「ヒト」が、よりよく生きていくために役立つことができる仕事に巡り合えたことを幸運だと思っています。



愛育委員・栄養委員の皆さまと



岡山県備北保健所長
川井 睦子

岡山県出身。平成11年名古屋市立大学卒業。13年～15年まで名古屋市内の病院で臨床。16年4月岡山県に入庁。県庁、保健所勤務を経て26年4月より現職。